山室山妙楽寺

岩津資雄

先頃久しぶりに、伊勢の山室山妙楽寺を訪れた。山室山は本居宣長の奥墓の所在地として広く知られているが、妙楽寺は宣長ゆかりの寺院で、その山腹に在る。私は松阪公園内にある宣長の遺宅鈴屋（すずのや）には折々訪れているし、同じ公園内に近年完成した宣長記念館も見学しているが、どういうものか山室山のほうは少年時代に訪れたきりになっていた。山室山は今では松阪市内に編入されているが、旧松阪市内から約十キロの山間部に在って、交通の便は今でもさほどよくなっていない。これは言いわけにもならないが、そんな事情もあって山室山には半世紀余りもご不沙汰になっていたのである。ご不沙汰という言い方は少々馴々しく聞えるが、私が少年時代に山室山を訪れたのは妙な因縁からであって、特に鈴屋翁追慕とか妙楽寺詣うでというような殊勝なものではない。それは中学二、三年生の時のことであるが、私は夏になると脚気をわずらっていた。その頃脚気の治療といえば麦飯を食べること、どこか田舎へ転地して素足で朝露を踏むこと、などといわれていたが、親たちのそうした考え方から、私の転地先に選ばれたのが山室山の妙楽寺であった。妙楽寺はそうした療養所だったわけではないが、たまたま当時の住職沢木祖立師の妻君が、以前私の家にいたことのある人だったので、その縁故から私は同寺の庫裡に下宿させて貰った。そうして私は、あの人里離れた山室山に夏休みの二夏を過ごしたのであった。先頃の山室山行きは、短い旅行中のひとときではあったが、その遠い憶い出の跡をたどることができた。

○

私は津市からM君の運転する車で山室山に向かったが、昔松阪から人力車で往復したときには田圃路を曲りくねって、ずいぶん遠い思いをして行ったのが、まるで嘘のように思えた。道路はよくなっているし、それに道路に沿うた農家は町屋らしくなって延々と続いていた。しかし平野部を離れて山室山麓に近づくと、昔を憶わせる山村風景が展らけてきた。私は山室山が近年松阪市の公園となったと聞いていたので、当世風な観光地化を内心恐れたが、そのような気配は全くなかった。折から紅葉には早い季節で格別の眺望もないが、彼岸花や尾花が畷みちを咲きつづっていた。山麓の集

落を抜けると木立に覆われた山路となるが、その途中新しく駐車場の広場が設けられているほかには、一軒の人家も見かけなかった。駐車場で車を降りて少し登ると妙楽寺である。ひっそりした境内には血天井と呼ばれた堂宇と、本堂と一続きになった庫裡の建物が、古色蒼然として昔ながらのたたずまいを見せていた。庫裡が明けっ放しになっているので、台所の土間から裏庭へ廻わってみたが、人の気配がない。何しろ突然の往訪なので留守を食うのも致し方ないが、もう一度帰りがけに出直すことにして、奥墓のある山頂へと向かった。妙楽寺から山頂までは半キロほどの山路だが、私には忘れがたい往還である。妙楽寺に泊まっていた私は毎朝未明に起き、素足のままこの山路を頂上まで往復するのを日課とした。素足に朝露を踏むという療養法を実行していたのである。往き路はまだ暗闇で、ずいぶん気味がわるかった。不意にバタバタと、脚もとの草叢や木立の間から雉や山鳩の飛び立つ翅の音に、なんども驚いた。頂上にたどりつくのは日の出の時刻で朝靄に包まれた伊勢平野を距てた伊勢湾の彼方に、朝日が昇った。私は日の出を拝むと次には、「本居宣長之奥墓」に詣って妙楽寺に戻る。これが日課のコースであった。

久しぶりに登った山室山の頂上は木立が刈りそけられて明るくなり、「山室山公園松阪市」の立札が建っていた。しかし公園らしい施設はなく、折から人影もなかった。奥墓は公園を背にした木立の陰に昔のままの姿をとどめていた。ただ、かつては墓碑を後ろから覆っていた一本の桜の老樹が、今は若木に替わって、紅葉しているのが目を引いた。この奥墓は鈴屋翁みずからの選定、設計に成ったものであるが、その遺言書を見ると奥墓の図面が描かれ、この桜の木を植えこむ位置が示してある。そして「桜は山桜之随分花之宜き木を致吟味、植可申候。勿論後々もし枯候はば植替可申候」と、桜樹の寿命を見越しての注文まで書き添えてある。今見る山桜の若木は、その植え替えられた何代目かのものであろう。鈴屋集には「山室の山の上に墓どころを定め」たときの歌、

山室に千歳の春の宿しめて風に知られぬ花をこそ見め

が載っている。「風に知られぬ花」として恃まれたのがこの墓側の山桜だと思って見ると、ひとしおあわれが深い。

○

奥墓詣うでの帰途妙楽寺に立ち寄ると、こんどは住職夫婦がおられた。この住職は私に馴染みのあった沢木祖立師から三代目に当たるという人で、祖立師とは血縁も師弟関係もないということだった。私は住職の許しをえて、昔寝起きしていた庫裡の二階に昇ってみた。二階の客間は眺望のよい部屋で、その当時床の間や襖には鈴屋翁の墨蹟が掛けてあったのを記憶している。部屋の隅には鈴屋翁遺愛という文机・硯箱などもあった。この客間は、本居さん（鈴屋翁のことを地元では一般にこう呼んでいた）が花見をした部屋だとも聞いていた。掛軸は二三幅あったと思うが、私の記憶にあるのは、妙楽寺の名を詠みこんだ、

寺の名の妙にたのしき春日かな花のさ

かりを思ふどち来て

という歌と、今一つは有名な「朝日ににほふ山桜花」の歌を書き入れた鈴屋翁の肖像画だった。もっとも今にして思うことであるが、鈴屋翁の肖像画には幾通りかある。文字通りの自画自讃のもののほか、絵師に描かせた肖像画に歌の讃をしたものや木版刷りのものもあるから、私が此処で見たのはそのうちのどれであったかはわからない。いずれにしてもこの部屋にはそうした鈴屋翁ゆかりの遺品が飾られていたのに、今見る同じ部屋にはそうしたものが何一つ見当たらなかった。住職に聴いてみたが、昔のことはご存知がない。住職から聞きえたのは、本居さん関係のものは妙楽寺に残っていないということ、それらの一切は山麓の某々二家の土蔵に収まっているということだった。それには何か事情のあることとは思われたが、私には解せなかった。

解せないことは今一つ——昔は山室山名所絵葉書があって、私はそれをこの庫裡で頒けて貰った記憶がある。その一部は今も手許にあるが、それには妙楽寺発行と印刷されている。ところが今の妙楽寺にはそうしたものもない。私の予想では今こそそうした絵葉書とか、また名所案内のパンフレットの類がいろいろあるものと思っていた。住職の話にも、山室山は近年、春の花見どきなどには行楽客でずいぶん賑わうというし、奥墓には遠方からの参拝客もふえているというから、絵葉書などの需要も相当にありそうなものである。しかし住職の話をよく聞いてみると、山室山に来る人は多いが妙楽寺に立ち寄る人は余りないということらしい。そうだとすれば、寺で絵葉書など扱っても商品にはならないわけである。

それにしても妙楽寺で絵葉書の一つも扱われないのはいかにも惜しいことだ、と私には思われた。やはり昔のように、額縁に入れた見本の絵葉書が庫裡の入口に掛けてあったほうがいいのではないか。これは必ずしも私の懐古趣味ではない。そうしたものがあれば、それがよすがとなって人々の足を妙楽寺にとどめるだろうし、鈴屋翁のゆかりを偲ばせることにもなると思うのである。山室山を訪れる人々にとって妙楽寺の存在は、いわば唯一つの足がかりであろう。この人里離れた山室山にこうした足がかりがないとすれば、遠来の人などは取りつく島のない思いをするかも知れない。それはとにかく、妙楽寺はたとい鈴屋翁の遺品を残していなくても、歴然とした鈴屋翁ゆかりの寺院である。もしも妙楽寺を訪れる人がなくなり、この鈴屋翁ゆかりの事実が忘れられてゆくならば、妙楽寺は無名一介の山寺となりはてるほかはない。——久しぶれりに妙楽寺を訪れた私は、こうした感傷を遺して山室山を降りた。